

商業科教育法に関する実践研究

鈴木 隆之 (非常勤講師)

1 はじめに

平成24年度秋学期および平成25年度春学期において実施した商業科教育法Ⅰ・Ⅱの実践研究を次の3つの目的で実施する。

- (1) 2年間の授業内容を見直すとともに、その課題を平成26年度以降の商業科教育法Ⅰ・Ⅱの授業に生かす。(P D C Aサイクルにおける「C」と「A」の役割を持たせる)
- (2) 高等学校において、平成25年度に完全実施となった学習指導要領に対応しながら、商業教育が始まって以来の本質的な商業教育の「不易」の部分と現在および将来において社会や時代の変化に応じて必要とされる商業教育の「流行」の部分は何かを探る。
- (3) 本学卒業生が各都道府県の商業科教員としての採用と採用後の任用において優秀な資質を身につけると共に、教師の理想や現実をしっかりと認識し、これからの商業教育に必要な教師となる意識を高揚させるための方策を探る。

2 平成24年度秋学期の授業計画(14回分)と実施状況

- (1) 策定した授業計画
 - ア 前任の非常勤講師が実施した平成23年度の授業計画に基づいて、ほぼ同じ内容の授業計画を策定する。
 - イ 教職課程の他の科目と内容ができる

だけかぶらないように授業計画を立てる。

- ウ 新学習指導要領開始の前年ということもあり、過去の改訂内容および今回の改訂に関する中央教育審議会の答申と、それを受けた学習指導要領改訂の背景と趣旨の説明をした後、商業科教育の改訂内容について説明する。
 - エ 商業科全体を理解するために、ビジネス基礎を中心とした指導法について、説明する。
 - オ 指導書に基づいた年間指導計画の内容や作成方法について説明する。
 - カ 年間学習指導案や教科書、指導書に基づいて、1時間の学習指導案と板書計画案を作成し、範囲を限定し、一人10分程度の模擬授業を実施する。
 - キ 模擬授業と並行して、授業の展開内容のそれぞれのポイントを説明する。
- (2) 評価
- ア 定期考査 実施しない
 - イ 評価対象
 - ①自己紹介レポート(商業科の目標とする教員など)
 - ②出席状況(出席回数および授業に組み込む意欲)
 - ③レポートの提出(学習指導要領改訂内容と評価規準に関する2題)
 - ④学習指導案と板書計画案

⑤模擬授業

⑥模擬授業観察記録

(3) 実施状況

ア オリエンテーション（第1回目の授業）について

年間計画の確認とともに、この授業の評価内容について説明した。

1年目の授業ということもあり、最終的な評価規準を明確にできないまま、授業を開始することになったことは残念であったが、学生の授業に取り組む意欲は2年目と比較して差はなかった。

イ 配付資料について

2年目の実習室と異なり、通常の教室での授業であったことと、プレゼンソフトを使わずに授業を行ったため、提示する資料はすべて印刷・配布した。

平成23年度の授業計画には学習指導要領改訂の内容は含まれなかったようであるが、平成24年度は改訂を含めて過去の改訂の背景と趣旨に関する資料を配付した。また、今回の改訂にともない、評価規準の改訂が行われたため、その資料も配布した。結果的に多くの資料を配布したため、学生は資料の整理や復習を適切に行うことが必要となった。しかし、資料整理は授業準備の第1歩であり、その意味での効果はあったように思われる。

ウ 商業科教員に求められる資質について

商業科教員を目指す中で、愛知県教育委員会が求める教師としての資質な

どについて具体的に愛知県教育委員会教職員課が出している採用試験の実施要項や実際の問題を教材提示装置を使って提示し説明した。残念ながら、学生にとっては実感がわからない様子であった。もう少し時間をとるべきであった。

特に、これまでの課題解決能力の育成に加え、新学習指導要領では、新たに起業家精神の育成やディベート、メソッドなどを取り入れることにも十分に対応できる資質が必要であることをしっかり説明することが必要であった。

エ 学習指導要領改訂および新たな評価規準について

中央教育審議会の答申や、それを受けた学習指導要領改訂の背景と趣旨については、他の科目と内容が重複したように思われるが、商業科教育の改訂内容の説明も必要であったため、少し時間を取って説明した。

時代の変化(特に経済の変化と教育)について、具体的な資料を使って説明した。特に、米国を中心とする世界経済の動きと日露戦争後の日本経済の動きにあわせて、日本の教育の動きを説明しながら、その中で行われてきた商業教育の動きについて説明を行った。

現在の日本における商業教育がいかに必要であるかを学生に訴えたが、学生にとっては一般論として受け取っただけで終わってしまったようで、残念

であった。バブル経済の崩壊後20年以上が経過し、受講している学生はこの期間に生まれ、デフレ期の中で育ってきたことから、実感がわからないのであろう。

また、「評価規準」と「評価基準」の違いなどの基本的な教育用語の説明とともに、国立教育政策研究所から出された「評価基準の作成、評価方法の工夫改善のための参考資料（高等学校専門教科商業）～新しい学習指導要領を踏まえた生徒一人一人の学習の確実な定着に向けて～」の概要を説明した。

ここまでの説明を終えたところで、次の2点について概要をレポートにまとめ、提出させた。

- ① 「学習指導要領および解説の変遷と、21世紀のビジネス教育の視点から見た商業教育の目的について」
- ② 「評価規準を踏まえた商業科目の授業について」

レポートの記載内容は、表面的な内容だけで終わっていたり、理解不能な内容が記載されているものが多く、資料の整理や説明内容に問題があったと反省した。この課題レポートの作成意義について、最初の授業でしっかりとその目的や具体例を示すべきであった。

オ 模擬授業の実施科目について

受講した学生のほとんどが商業科の出身で、普通科や他教科は1割にすぎなかったが、普通科の出身であっても

模擬授業を行いやすい科目としてビジネス基礎を対象とすることとしたが、商業科出身の学生であっても、その内容を十分に理解しているわけではなく、どこまで補足すべきか迷う場面が多くあった。

カ 年間指導計画について

指導書に基づいた年間指導計画の内容や作成方法について説明したが、学習指導要領と教科書・指導書の関係や評価規準との関係・結びつきについて、なかなか理解でないうであった。体系的に図式化した説明が必要である。

キ 模擬授業の実施について

年間学習指導案や教科書、指導書に基づいて、1時間の学習指導案と板書計画案を作成し、それに基づいて一人10分程度の模擬授業を行うこととしたが、最後の時間から逆算して計画したため、結果的にあわただしくなってしまう。模擬授業の実施内容について時間をかけて説明することができなかったことが最大の反省となった。

4名程度のグループで模擬授業に対する意見や反省をまとめ、発表してもらい次に生かすなどの工夫をしてみたが、結果的には、1回だけの取り組みに終わってしまい、全体的なレベルアップはできなかったが、それまでの経験を生かした模擬授業を実践できた学生もいた。

このことから、実際に授業実践力を身につけさせるためには、学生一人

が1回だけの取り組みで終わることなく、段階を踏んだ模擬授業を繰り返す行うことが必要である。

(4) 学生からの要望・感想

ア 模擬授業について

- ① 体験できた時間が非常に短く、回数も1回しかなかったことが残念だった
- ② 自分が思うような授業をすることができなかった
- ③ 準備不足を痛感した
- ④ 最低30分程度の模擬授業を経験したかった
- ⑥ 実際に体験でき、貴重な経験ができた
- ⑥ 予定が変更した時があり、事前の予告がほしかった

イ 教育実習について

- ① どのような事前準備が必要かわからず、大変不安である
- ② どのような手続きが必要なのかわからない

ウ 採用試験について

- ・内容を知りたい

(5) 学生からの要望への対応

ア 教育実習と採用試験について質問があった内容を次の時間に概要を説明した。

イ その他の内容については、次年度の課題とした。

3 平成25年度春学期の授業計画（15回分）と実施状況（アンダーラインが変更点）

(1) 策定した授業計画

ア 使用教室の変更について

使用教室を実習室に変更し、プレゼン形式の説明やプレゼン形式の模擬授業を可能とする。これにより、資料の大量配布がなくなる。

ただし、説明資料を配布しないことにより、学生の手元に資料がないため、メールにより資料を配信することとし、学生は必要な資料を画面で確認するか、必要に応じてプリントアウトしたものを利用できるように計画した。

イ 模擬授業の回数について

昨年度の授業計画を元に授業計画を策定したが、昨年度の学生の反省や来年度に向けた要望から模擬授業の時間と回数をできるだけ多くする。昨年度より授業の回数が1回増えて15回となったため、少し余裕を持って計画を立てることができるように思われる。

模擬授業を一人3回実施することとし、段階を踏んだ模擬授業の実施と模擬授業の中で必要な説明を計画する。

- ・1回目 指示した内容を板書し、読み上げる
- ・2回目 指定したプレゼンに従って、その中の5分をそのまま実施する
- ・3回目 1時間の指導案を作成し、その中の20分の模擬授業を

実施する

1回目の模擬授業は1時間、2回目は2時間、3回目は8時間の計11時間で実施し、11時間の模擬授業を実施する各時間の前後や途中で必要な説明を行うとともに、模擬授業以外の4時間の授業内容を精選する必要があるがでてきた。

ウ メールの利用について

次の場合にメールを利用する。

(学生から)

- ・欠席や遅刻などの事前連絡
- ・授業内容に関する質問
- ・指示された課題の提出

(教員から)

- ・学生からの質問については、原則として次の授業で説明するが、個々の学生へはメールで回答
- ・次回の授業内容などについての変更予告
- ・その他必要な連絡、通知

エ 昨年度の課題への対応

① 学習指導要領改訂について

昨年度商業に関する内容以外について時間を取り過ぎた反省と、模擬授業の実施時間の増加から、商業以外の内容についてできる限り簡単な説明で終わるように心掛ける。

新学習指導要領開始の年ということもあり、新学習指導要領の特徴や概要について全般的な説明をした後、商業科教育の特徴と重点目標について説明するとともに、愛知県で実施している新たな取り組みについても

説明する。

- ② 商業科全体を理解するために、昨年度に引き続いてビジネス基礎を中心とした指導法について説明し、他の商業科目についても関連して触れる。
- ③ 指導書に基づいた年間指導計画の作成内容や作成方法、留意点について説明する。(実際には作成せず、例題の説明にとどめる)
- ④ 年間学習指導案や教科書、指導書に基づいて、学生が1時間の学習指導案と板書計画案を作成する。それぞれの関係について説明する。
- ⑤ 1時間の学習指導案に基づいて一人が20分ずつの模擬授業を行い、自己評価とともに学生による評価を並行して行う。
- ⑥ 模擬授業と並行して、授業の形態や授業展開、適切な指導方法・指導内容の具体例について丁寧に説明する。

(2) 評価

ア 定期考査 実施しない

イ 評価の対象とその目的

- ① 自己紹介レポート (尊敬する教師像、目指す教師像)

目的：商業科教員としての教育職に向けてのキャリア教育として導入するとともに、尊敬している教師像と自らが目指す教師像を明確にするため。

- ② 出席状況（出席回数と授業に取り
組む意欲、欠席などの事前メール）

目的：欠席や遅刻については事前
の報告メールを義務づける
ため。

模擬授業観察記録からも確
認する。

- ③ レポートの提出とその目的

- 「学習指導要領および解説の変遷
と21世紀のビジネス教育の視点
から見た商業教育をどのように
行うべきか。（商業科教師とし
ての目標）」

目的：世界経済と日本経済の動向
と日本における教育史の概
要と学習指導要領の変遷か
ら、学生自らが教員として、
これからどのようにビジネ
ス教育を行うべきか、商業
科教師としての目標を考え
させるとともに、授業内容
を適切に理解・整理できて
いるかを確認するため。

- 「評価規準を踏まえた商業科目の
授業をどのように行うべきか。
（商業科教師としての目標とす
る授業）」

目的：評価規準と評価基準の違
い、4つの評価の観点を明
確にし、商業科目の授業を
実際にどのように行うか、
自らの理想的な授業の目標
を考えさせるとともに、授

業内容を適切に理解・整理
できているかを確認するた
め。

- ④ 学習指導案と板書計画案の提出と
その目的

目的：1時間の授業の内容と進め
方を理解しているかを確認
するため。

1時間の授業の中で板書し、
生徒に提示する内容（プレ
ゼンソフトによるものを含
む）を明確にすることによ
り、授業をより適切に行う
ため。

- ⑤ 3回の模擬授業とその目的

- ・1回目（板書の基本と発声）

目的：文字の大きさ、形、位置を
理解し、黒板全体をイメー
ジした板書をできるように
し、発声の適切な音量や音
質を確認することで、初め
ての授業を体験するため。

- ・2回目（模擬授業の基本）

目的：用意されたプレゼンソフト
をそのまま使うことで、授
業の準備負担を少しでも減
らしながら、実際に教壇に
立った2回目の授業を体験
するため。

- ・3回目（段階的な模擬授業）

目的：学生自らが作成した学習指
導案に基づき、前回までの
2回の模擬授業の体験を踏

まえて、20分間の模擬授業を体験することで、教育実習などの次の段階に進むことができるようにするため。

この3回目は8回に分かれて模擬授業を行うことから、始めと終わりでは大きな差が生ずる。そのため、第1段階・第2段階・第3段階の3つの段階で条件を変えて実施することで、評価において有利不利がないようにする。

第1段階は、決められた範囲を特に指示なく実施し、基本的な内容について評価する。(使用教材の指示なし)

第2段階は、決められた範囲について、指示内容に従って実施し、次第に応用的な内容についても評価する。(使用教材の指示あり)

第3段階は、1～2時間程度の範囲の中から実施する範囲について直前に指示を受けてから実施し、すべての内容について評価する。(使用教材の詳細な指示あり)

⑥ すべての模擬授業観察記録

目的：模擬授業の段階に応じて設定した評価項目ごとに他の学生の評価を行い、自らが実施する際の参考とするた

め。

⑦ 最終レポート(授業を受けた結果、商業科教員への意欲などについて)

目的：15回を通して、受講した内容のまとめと、将来の教員生活に向けての意欲を喚起するため。

(3) 実施状況

ア 実施教室の変更について

① 説明方法の変更

- ・実習室に変更になったことで、プレゼン形式で説明を行った。
- ・事前に必要な資料をメールで添付することで、学生がいつでも必要な情報を取り出すことができるようにするとともに、授業で参照できるようにした。これにより、印刷配布物を減らすことができた。
- ・それでも多くの資料を印刷配布したため、どの資料がどこにあるのかを整理することが必要であった。

② 模擬授業実施方法の変更

- ・昨年度はすべて板書と説明による模擬授業を実施した。
- ・本年度はプレゼンソフトを事前に準備して、それを利用した事前演習的な模擬授業を短時間で実施することができ、効果的であった。

イ オリエンテーション(第1回目の授業)について

年間計画の確認とともに、評価項目と評価規準を明確にした。特に、商業科における4つの評価の観点について

説明した。商業科の教師として、現実的で具体的な内容で説明することが大切である。

「関心・意欲・態度」は、生徒の興味関心をどれだけ引き出すことができたかという教師に対する評価でもある。商業科の20科目のすべての内容を熟知することは必要であるが、その中で教師が生徒に対して何をどのように指示し、説明し、生徒の状況に応じていかに対応するかが大切である。そして、生徒の自主性や向上心を育てるためには、教師自らがその見本としての存在であることも教師としての重要な資質である。これらの観点を特に重視し、この点に留意して評価することを伝え、実施した。

また、模擬授業を3つの段階を踏んで行う中で、対象が大学生ではなく、高校生の理解度に応じた指導をするように伝えた。

ウ 学習指導要領の変遷と商業教育について

第1回のオリエンテーションで、商業科教師として必要な知識（憲法以下関係法令の概要と教員採用試験における出題、その重点箇所の解説とともに、愛知県が求める教師の資質）について説明した。また、学習指導要領改訂の背景と趣旨、評価までの範囲について、レポートの作成・提出について予告した。授業の始めに「自己紹介レポート」を作成し、提出させたが、本年度も商

業科出身が9割で商業科以外の出身者は1～2名であった。現在の勤務校の商業科教員の中に商業科以外の出身者が相当数いることを考えれば、本学の商業科教員希望者には商業科以外の出身者が少ない。

第2回は、学習指導要領の概要と学習指導要領解説の総則と商業編を説明し、学習指導要領の重点目標を説明すると共に、商業科の目標や分野・科目とその概要を説明した。さらに、学習指導要領の改訂を受けた「愛知県産業教育審議会」の答申における「新学習指導要領の趣旨を踏まえた人材育成方法の5か年計画（4項目）」についても触れ、教育現場で実際の動きについて説明した。

また、高等学校全体の種類（公立、私立）、課程（全日制、定時制、通信制）、学科（普通科、専門学科、総合学科、特別支援学校）、専門学科（農業、工業、商業、・・・）について説明し、商業という枠組みを客観的に説明した。

さらに、愛知県公立学校の商業科教員の勤務先について説明し、採用後の赴任先を具体的にイメージできるようにした。

最後に、商業の4つの分野（マーケティング分野、ビジネス経済分野、会計分野、ビジネス情報分野）ごとに、学生にそれぞれの科目名を板書させ、文字の大きさ、形、位置について説明

し、以後の模擬授業で板書する際の参考とした。高校の多くの教室ではチョークを使用しているが、実習室などではホワイトボードに専用のペンを使用しているため、違和感はない。ホワイトボードのサイズから20科目を2回に分けて、10名ずつ約20分で実施した。10名が板書したところで、板書した科目名を読み上げさせ、発声の基本について説明することができた。これを第1回目の模擬授業とした。ほぼ全員の声が小さく、聞こえづらかった。2回目以降の模擬授業のことを考え、「一番後の生徒に聞こえればよいのではなく、一番後の生徒に十分に届く声よりも大きい声を出すこと」を始めから注意すべきであった。

第3回は、学習指導要領解説商業編における20科目を説明するとともに、基礎的科目であるビジネス基礎、総合的科目である課題研究、総合実践、ビジネス実務の概要を説明した。その後、ビジネス基礎、簿記、情報処理の3科目についてその概要を説明した。

第4回は、評価規準と評価基準の違い、4つの評価の観点、履修と修得など基本的な用語の説明とともに、国立教育政策研究所から出された「評価基準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料（商業）」の内容を説明した。さらに、観点別評価のメリットとPDCAサイクルについても詳細な説明を行うとともに、実際の授業を行

う際に評価が大切であることを説明した。この日、第6回から使用する教科書・問題集を配布したが、時期的に遅かった。

エ 年間指導計画と学習指導案・板書計画案について

第5回は、年間指導計画の内容と作成方法、学習指導案と板書計画案の内容と作成方法について説明した。学習指導要領と使用教科書、その指導書の内容と年間指導計画との関係、年間指導計画と学習指導案との関係について詳細に説明したつもりであったが、後日提出された学習指導案を見ると、それぞれの関係が理解できている学生が少なく、説明方法を工夫する必要がある。

オ 模擬授業の対象について

基本的に高校1年生が履修する科目であれば、当然目の前にいるのは高校1年生であるが、模擬授業では同じ大学生である。ともすれば、模擬授業は大学生に対して教科書の説明になってしまう。高校1年生がどのような反応を示すか、その高校1年生に対する説明の仕方を説明することが必要となる。限られた時間の中で高校生がどれだけ理解しているかを適確につかみながら進めることが大切である。実際には定期考査問題や小テストなどを作成し、その解答や解説、別解や許容範囲などそれぞれの生徒に対して準備が必要となる。このことを前提に2回目以降の

模擬授業を行った。

カ 2回目の模擬授業について

第6回と第7回は模擬授業の2回目(旧学習指導要領における「ビジネス基礎」の1時間分の授業内容をプレゼンソフトのままの授業(必要な板書を含む)を実施した。一人5分で実施し、実施後の解説や評価表の記入、次の準備と合わせると一人8分程度、全体で2時間を要した。

また、各自が繰り返し説明の練習ができるように事前にメールで送信しておいたので、繰り返し練習し、本来の授業らしい学生もいた。

なお、この時点では、教卓に立った授業を体験することが目的で、ポイントを明確にして行うことが必要である。特に、相手は目の前にいる大学生ではなく、高校生であること。どのように説明を進めるかなど、模擬授業評価表作成上の注意に詳細にポイントを説明し、模擬授業自体は短時間でを行い、良い点と改善すべき点を明確に伝えることが必要である。

キ 3回目の模擬授業について

事前に指定した範囲(4時間分)の中の1時間分の学習指導案と板書計画案(板書またはプレゼンソフト、あるいは両方)を作成し、全員に事前に提出させ、その半分の模擬授業を全員が実施した。約20名が20分程度で実施するため、連続の2時間授業で5名ずつ、8時間で実施した。

その8時間を3段階に分けて実施し、段階に応じた評価を行った。

第1段階は、決められた範囲について使用教材を指示することなく実施し、基本的な内容ができているかを評価した。

第2段階は、決められた範囲について、使用教材を指示し、応用的な内容についても評価した。

第3段階は、事前に使用教材を詳細に指示し、1～2時間程度の範囲の中から実施する範囲について直前に指示し、すべての内容を評価した。

結果的に、目の前にいるのが、大学生ではなく高校生であるという実感がつかめず、発問に対して大学生としての回答が淡々となされてしまい、説明のポイントがずれてしまう場面が多かった。

4 平成26年度の授業計画と目標(アンダーラインが新たな変更点)

(1) 授業計画

ア 使用教室について

実習室の利用はメリットが大きく、前年の反省を生かしてより効果的に利用したい。また、資料配付について、何をいつ配布したかを明確にし、資料を効率的に参照できるようにしたい。

イ 模擬授業の回数について

模擬授業は前年通り一人3回実施し、段階を踏んで模擬授業を実施し、模擬その中で必要な説明を適切に実施する。

なお、模擬授業の時間は多少短くなくても、効果が薄れることはないと思われるので、説明時間をしっかり確保することが大切である。

- ・第1段階 指示した内容の板書と発声（科目の内容を含む）
- ・第2段階 指定したプレゼンに従って、その中の5分をそのまま実施
- ・第3段階 1時間の指導案と小テストの作成、その中の20分の模擬授業

ウ メールの利用について

オリエンテーションで登録を行い、次回授業までに全員の送受信を可能とする。

（留意事項）

- ・欠席や遅刻などの事前連絡を徹底させる。
- ・指示された課題の提出、授業内容に関する質問や連絡には期限を明示する。
- ・教員からの連絡と回答についてのルールを明確にする。

エ 昨年度の課題への対応

① 説明内容について

- 「学習指導要領改訂の背景と趣旨の概要から現在の商業教育に求められている内容」と「評価基準の概要から商業教育に求められている内容」について、明確な説明を行う。
- 限られた時間の中で、ポイントを

押さえた説明が必要であるが、オリエンテーション時にレポート提出の指示を行い、必然的に授業の説明に集中するよう指示を行う。

○P D C Aサイクルと評価の関連を理解でない学生が多い。丁寧な説明が必要である。

○本年度のレポートには、評論的な表現が多くあった。それぞれの内容に、「どのような教師を目指したいのか」「どのような授業を行いたいのか」、論評ではなく、主体的な表現で記述するよう指示が必要である。

② 商業科の目標について

○時代の変化と学習指導要領の改訂内容について、商業科の観点から説明するとともに、学習指導要領解説を印刷・配布し、重要事項をマークするなどにより、概要を明確にして、より理解を深める必要がある。

○愛知県の5か年計画などを最後に説明することも効果的であると思われる。

③ 商業科目の大系と20科目の内容について

・本年度は科目の読み上げだけであったが、来年度は商業科目の全体図とともに科目の目標を印刷・配布して、学生に科目の目標を読み上げさせることも必要である。高校生に教科書の見本となる読み方

を示すことができる必要があるからである。その後、全体図を使いながら、それぞれの科目の目的や実施における留意事項などについて解説するとともに、過去の採用試験問題を解説することで、より理解を深める。

④ 商業科教員になるための心構えについて

生徒の自主性や向上心を育てるためには、教師自らがその見本を見せることも重要な教師としての資質である。特に、商業の授業ではこの観点を重視する必要がある。これまでの大きな目標である課題解決の能力の育成に加えて、今回の学習指導要領改訂で重視しているコミュニケーション能力の育成、積極性・創造性の育成などにあたっては、特にこの点に留意して実施させることが必要であり、模擬授業においてもディベートやケースメソッドを取り入れるようにする必要がある。

また、商業科教員には普通科出身の教員が多く在職している。彼らは非常に熱心で情熱的に商業教育を行っている。教師として求められる資質について、学生自身が不足面を認識し、それを補う努力が必要である。

なお、愛知県内の商業科の状況などを説明することは、愛知県外出身のみならず、県内出身の学生にとっても具体的なイメージを持つために

重要な役割があると思われるので、来年度以降も継続していきたい。

⑤ 模擬授業の進め方について

○ 準備

- ・ 基本的な発声や言葉遣い、基本的な説明方法、基本的な指示方法、基本的な目付、基本的な板書方法などを説明する中で、良い例と悪い例を具体的に説明する必要がある。中途半端になっているので改善したい。
- ・ 学生が準備不足とならないよう、模擬授業で使用する資料は可能な限り早めに配布・送信しておくことが必要である。
- ・ 「学習指導要領」「教科書」「指導書」「年間指導計画」「学習指導案」「板書計画案」の意味と関連が理解できない学生が多く、関連図を用いた説明が必要である。

○ 1回目（板書と読み上げ）

- ・ 板書は、ただ書くだけの作業にとどまらないようにし、板書した時に何を指導するか、必要な指導内容を理解することが必要である。
- ・ 科目の説明は、ただ単に読み上げるのではなく、板書と同様に生徒が読み上げた時に何を指導するか、必要な内容を予測しておくことが必要である。

○ 2回目（プレゼンの内容のまま

実施)

- ・第2回は旧学習指導要領に基づく教科書のプレゼンソフトを使用し、第3回は現学習指導要領に基づく教科書で実施したため、教科書内容が異なり、学生が戸惑った。次年度では、教科書の違いを明確にして学生が戸惑わないようにする必要がある。
 - ・目の前にいるのは、大学生でなく高校生であることをしっかりと認識させ、高校生に対する言葉遣いや態度を重点において実施する必要がある。
 - ・本年度は5分程度で区切りのよい所で切ったが、中途半端であっても効果はほとんど変わらないため、次年度は事前の説明を十分に行い、単純に5分で区切って実施する。
- 3回目（20分の模擬授業）
- ・本年度は事前に20分で行う範囲を明確にせず、ある程度学生の判断に任したが、1時間分の内容を10分程度で端折ってしまう学生がいた。来年度は範囲を事前に明確にした上で、段階に応じて実施する。
 - ・内容が十分に理解できていないために、授業として成り立っていない学生が多いため、学習指導案や板書計画案とともに5分間確認テスト（問題と模範解答）をメールで提出させる。
 - ・模擬授業の準備負担をできるだけ少なくできるように、本年度と同じように段階に分け、目標も3段階に分ける。
 - ・模擬授業の中で問題集の解答を学生に答えさせたが、模範解答もつけて配布したため、答えを読み上げて終わってしまった。そこで、確認テストは模擬授業中に模擬授業を行う学生自身に配布して実施する。
 - ・本年度は座席順に模擬授業を行ったが、来年度は順番に実施しない。また、毎時間の模擬授業に対する評価表の得点を重視する。
 - ・第1段階では、誰がどの範囲を実施するか、事前に指示し、指示された範囲の学習指導案、板書計画案、確認テストを使用する。使用する教材を事前に指定し、基本的な内容について、目標を明確に指示する。
 - ・第2段階でも、誰がどの範囲を実施するか、事前に指示し、指示された範囲の学習指導案、板書計画案、確認テストを使用する。使用する教材を事前に指定し、応用的な内容について、目標を明確に指示する。
 - ・第3段階でも、誰がどの範囲を実施するか、事前に範囲を指示

し、指示された範囲の学習指導案、板書計画案、確認テストを用意する。なお、50分の前半と後半を実施直前に指示する。

(2) 評価

ア 定期考査 実施しない

イ 評価対象とその評価規準

①自己紹介レポート(尊敬する教師像、目指したい教師像、教師を目指す理由)

規準：商業科教員としての教育職に向けて明確な目標を持っている。

②出席状況(出席回数と授業に取り組む意欲、欠席などの事前メール)

規準：意欲がある(明確に意志表現できる)。報告連絡相談が適切である。

③レポートの提出

・「学習指導要領および解説の変遷と21世紀のビジネス教育の視点から見た商業教育をどのように行うべきか。(商業科教師としての目標)」

規準：授業内容を適切に理解・整理できている。
商業科教師としての明確な目標を持っている。

・「評価規準を踏まえ、商業科目の授業をどのように行うべきか。(商業科教師としての目標とする授業)」

規準：商業科目の授業の実施と評価規準との関わりを理解し

ている。

評価規準に基づいて、明確な授業目標を持っている。

④学習指導案と板書計画案および確認テストの提出

規準：重要ポイントをしっかりと理解し、適切に記載されている

⑤3回の模擬授業

規準：1回目(板書の基本と発声)

文字の大きさ、形、位置がおおむね適正で、黑板全体をイメージした板書ができ、発声の音量や音質もおおむね適切で、高校生に対する見本となっている。意欲的に取り組んでいる。

2回目(模擬授業の基本)

1回目の評価規準に加えて、実際の授業形式(用意されたプレゼンソフトをそのまま使って決められた内容を実施)において、生徒全体を確認(個別指導を含む)し、説明の速度や説明方法を工夫し、適切に実施できた。授業を進める中にそれなりの工夫が見られる。

3回目(段階的な模擬授業)

自ら作成した学習指導案に基づき、過去2回の模擬授業の経験を踏まえた20分間の模擬授業が正しい内容で、おおむね高校1年生の生徒が理解

できる説明や板書である。これまでの模擬授業が教育実習など次の段階に進むレベルにおおむね達している。

なお、この3回目は8回程度に分けて模擬授業を行うことから、始めと終わりで大きな差が生ずる。そのため、3段階に分け、条件を変えて実施することで、評価において有利不利がないようにする。

第1段階は、指示された範囲と指示内容に従って実施し、基本的な内容についてのみ評価する。(使用教材の指示なし)

第2段階は、指示された範囲を実施し、指示内容に従って実施し、応用的な内容についても評価する。(使用教材の指示あり)

第3段階は、1時間の範囲の中から実施する範囲について直前に指示を受けて実施し、すべての内容について評価する。(使用教材の詳細な指示あり)

⑥すべての模擬授業観察記録

規準：模擬授業の段階に応じて設定された評価項目ごとに適切に評価する。

⑦最終レポート（授業を受けた結果、商業科教員への意欲などについて）

規準：15回を通して、受講した内容を適切にまとめ、教員生活に向けてしっかりとした意欲を持ち、教師としての資質を自ら求め追求している。

5 おわりに

この研究により、平成25年度までの実施状況とその課題から平成26年度の授業計画と目標を立てることができた。目的の1つであるP D C Aサイクルにおける「C」と「A」の役割を果たすことができた。これをさらに発展させ、来年度以降の授業に生かしていきたい。

また、平成25年度に完全実施となった高等学校学習指導要領に対応しつつ、商業教育が始まって以来の本質的な商業教育の「不易」の部分と現在および将来における急激な社会や経済の変化に応じて必要とされる商業教育の「流行」の部分を意識しながら授業をすすめたことで、その都度「不易」の重要性を感じた。

今年も、本学卒業生が今後各都道府県の商業科教員として採用され、さらに採用後の任用に必要な優秀な資質を身につけると共に、商業科の教師としての意識を高揚させることを強く意識しながら、15回の授業を行った。商業教育の現場での活躍を期待したい学生も多く、真剣に授業に取り組んでくれた。彼らが将来の日本の商業教育を担ってくれることを願うとともに、この授業研究により来年度以降の商業科教育法の授業に向けた、いくつもの改善ができたことに感謝したい。

